

考古かながわ

第34号

2005年12月5日

三ツ沢貝塚発掘 100年と軽井沢「満郎」墓

坂本 彰

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター)

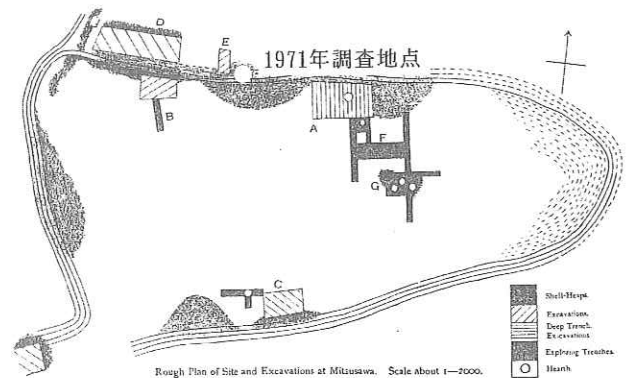
1

横浜市神奈川区の三ツ沢貝塚が、英国スコットランド生れの医師・考古学者、ニール・ゴードン・マンロー（横浜ゼネラルホスピタル院長）により、日露戦争直後の1905～06（明治38～39）年に発掘調査されてから、今年でちょうど100年がたつ。

それまでの発掘は遺物収集目的の短期的なものがほとんどで、三ツ沢貝塚発掘のような本格調査は初めてであった。当時は日本人種論（アイヌ・コロポックル両説）がはなやかで、マンローは火山灰や貝・土の堆積状況を観察し、貝層のみならず、人骨発見をめざして地山まで掘り下げた。それが出土人骨5体の時期確定につながり、また貝層下に炉や柱穴多数を確認し、竪穴住居の存在を指摘した。いわば、今日の縄文時代研究の根幹たる集落や家族構成論などの起点となったのである。

マンローはこれらの成果を、1908年『Prehistoric Japan』（先史の日本）に集大成した。三ツ沢貝塚は貝層・炉の分布やトレンチ配置を記した全体図が作成され、調査状況が一目で分かる。遺跡写真は層位とトレンチ内が中心で、およその位置が推定できる。遺物は土器片・石器・骨角器・貝で、なぜか炉埋設らしき完形土器がない。人骨は高島氏から借用した1点を含む頭骨計6点を図示、うち1点は拡大して紹介され、アイヌ人骨と説明している。当時においては、水準を抜く優れた報告といえよう。同書は欧州で先史日本の概説書として利用されながら、和訳がないためか国内で余り評価されなかった。

三ツ沢貝塚人骨について、マンローは『東京人類



1図 三ツ沢貝塚全体図と1971年調査地点
（『先史の日本』原図）

学会雑誌』に「後石器時代の頭蓋骨」（同255号）、「コロポックルに就て」（同268号）で解説している。これらはアイヌ説に立つ小金井良精が鑑定し、「頭蓋によりて日本石器時代人種を論じ得らるゝのは今回が初めて」（足立文太郎「本邦石器時代住民の頭蓋」同253号）となった。現在は東京大学総合研究資料館に所蔵されており（『東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録』1979年）、同館の諏訪教授によれば、個体別の報告は困難な状況にあるという。

三ツ沢貝塚の石器類は、1907年4月に東京帝室博物館へ寄贈された。その他の大半は1909年に故国の国立スコットランド博物館に寄贈された。2002年に北海道開拓記念館及び神奈川県立歴史博物館で、「海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから—」が開催され、三ツ沢貝塚の土

器4点(うち2点は『先史の日本』掲載品)が展示された((財)アイヌ文化振興・研究推進機構編『海を渡ったアイヌの工芸』2002年)。同館マンロー資料の調査は日本の研究者によって開始されたが、いまだ整理途上にあると聞く。

2

こうして存在が知れわたった三ツ沢貝塚は、大正から戦後にかけて、大場磐雄・石野 瑛・大山史前学研究所・林 国治・小島金之助などによって発掘され、縄文後期を主とする大量の遺物が出土した。

貝塚に西接する横浜二中(現横浜翠嵐高校)教諭の石野は、筒形土偶を含む出土品を「横浜三ツ沢台及び沢渡遺跡調査報告」で集成した。大山史前学研究所の調査遺物は戦災で失われたが、土器の概要は報告されている(池上啓介1932年)。林 国治資料は神奈川県立歴史博物館にあり、一部が常設展示されている。

これらは遺跡の時期や遺物のバラエティを知るためには有用だが、遺跡そのものの実態はマンロー報告以上に出るものではなかった。ところが1971年1～2月に横浜市埋蔵文化財調査委員会が行なった三ツ沢東遺跡の発掘調査(『昭和58年度横浜市文化財年報』)で、本貝塚に関する重要な知見が得られた。

現場主任の熊谷 肇(現神奈川県立図書館)によれば、調査区は貝塚の北東斜面で、貝層の厚さは1.5m前後あり、北に向かって傾斜していた。貝はハマグリ・サルボウなどの二枚貝が主体で、貝層下土層から多量の遺物が出土した。そして調査区の南側が幅広く、かなり深くまで掘りこまれた痕跡が認めら



2図 姿を現した三ツ沢貝塚の貝層断面
(角田三郎氏写真)

れたという。

その記録及び『神・仏・人』(角田三郎1991年)によれば、この部分の貝層は極めて良好に遺存していた。北側でかつ遺存状況のよい貝層は、マンロー調査のA地点とB地点の中間、E地点の南側にある。角田は調査地の西側にマンロー人骨の出土地を図示しているが、これは前記型録の「B地点第1人骨」の記載と合致する。石野報告の撮影地点も斜面であり、熊谷の目撃した掘り込みはマンロー以後の調査痕と推定される。以上のことから、1971年調査区は「マンローE地点を含む貝層の北半部」に相当し、これまで判明しなかった調査位置を確かめることができた。

出土遺物は堀之内式土器が中心で、石器・骨角器・貝製品などと共に三殿台考古館に保管されている。角田資料は、横浜市立汐見台・三ツ沢小学校に寄贈された。これらは岡本 勇により、『神奈川県史』考古資料編・『古代のよこはま』などに紹介されている。

3

マンローは生涯に4度結婚し、アデレーとの間に2男を、高島とくとの間に1女をもうけた。とく夫人は三ツ沢貝塚の発掘時に八木柴三郎と共に現地で監督にあたり、離婚後も援助を続けたという。大正に入りベルツ基金を受け、アデールと結婚した後に北海道のアイヌ研究と診療を開始している。

また軽井沢へ避暑に行き始め、1921年の夏には軽井沢国際病院を開設し、木村チヨを婦長に迎えた。ところが1923年には関東大震災が起り、横浜の自宅は資料や図書と共に壊滅してしまい、翌年には軽井沢サナトリウム(マンロー病院)院長となった。

この頃からアイヌ研究に本格的に取り組む、1932年に平取町二風谷に転居し、釧路周辺で貝塚などを発掘した。1937年にはアデールと協議離婚し、チヨと結婚した。そしてライフワークたるアイヌ研究の原稿が完成したが、健康に害をきたし、1942年4月、79歳で死去した。マンロー・チヨ夫妻の墓は、終焉の地、二風谷のトイピラの丘にある。

マンローのもう一つの墓は、晩年も夏期診療を続けた軽井沢町にある。これはチヨ夫人が、彼の百ヶ日に建立したものである。JR軽井沢駅の北西約800

m、離山通り六道の辻東側に軽井沢霊園があり、その東北隅に一辺約20mの外人墓地が設けられている。約50基の墓碑は（財）軽井沢会が管理しており、満郎墓は墓地の南端近くに位置している。

墓域は幅117・奥行192cmで、周囲を幅16cmの石6本で囲っている。内部は小砂利がしかれ、中央左右に線香立てが並ぶ。奥の墓碑は幅37・厚さ21・高さ67cmの位牌形で、表面は苔でおおわれている。

碑正面の上部には十字架が、中央部に「NEIL GORDON MUNRO MD&CM」、「BORN JUNE 16 1863 EDINBURGH」、下部に「DEAD APRIL 11 1942 NIBUTANI」、右側面に「医学并考古学者 満郎先生墓」、裏面下部に「妻千代子建」と刻まれている(2005年8月実査)。

マンローは1905年に日本へ帰化し、日本名「満郎」となっている。チョ夫人とすれば、軽井沢こそ夫と知り合いました共にすごした地である。多くの友人をはじめ、忘れがたい思い出が一杯つまっていたにちがない。夫没後は軽井沢病院に勤務しつつ、戦後までこの墓を守っていたのである(桑原千代子『わがマンロー伝』1983年)。

静まりかえった墓地に、遠雷だけがいつまでもひびき渡っていた。



3図 軽井沢霊園内にある「満郎先生墓」
(2005年8月 坂本撮影)

～ 関連展示会・講演会のご案内 ～

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターでは、三ツ沢貝塚及び軽井沢古墳などの展示・講演会を開催いたしますので、どうぞご来場下さい。

◆ 街にねむる貝塚と古墳—横浜市北東部の遺跡展— ◆

会 期①：2005年12月21日(水)～2006年1月15日(日) ※最終日は12時まで

会 場：かなつくホール(神奈川区民文化センター) ギャラリーA

(JR京浜東北線・東神奈川駅・東出口前 徒歩1分)

会 期② 2006年1月20日(金)～2006年2月12日(日)

会 場：横浜ユーラシア文化館・横浜都市発展記念館企画展示室

(みなとみらい線 日本大通り駅 3番出口 徒歩0分)

◆ 講演会 「三ツ沢貝塚発掘 100年」 ◆

日 時：2006年1月14日(土) 13:30～16:30

場 所：かなつくホール(同上)

講 師：岡本孝之・中村若枝・金子浩昌氏

問い合わせ：(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター TEL: 045-593-2406

相模国分寺現地説明会見学記

御代七重

平成17年8月28日「相模国分寺跡」国指定史跡整備に伴う発掘調査現地説明会が開催されるため、午前10時40分海老名駅を集合場所に見学会が行われた。

前日まで暑い日が続いていたが、当日はうす曇で少し過ごしやすさを感じる、見学会にはまずまずの天候であった。午前10時40分、寺田先生をはじめ30名ほどが集まり、現場に向かった。ゆっくり歩いて午前11時過ぎ現場に到着。現場にて資料を受け取り、現場担当者である須田誠氏による挨拶、そして向原崇英氏による調査状況の説明が始まった。

平成15年から再開されていた史跡整備を目的とした発掘調査において、今年は金堂跡伽藍地東側の区画施設(築地塀)、推定経蔵跡などの解明を目的とする調査が行われていた。

今日の本堂に当たる金堂は36本の柱からなる。この36本の柱を支える36個の礎石の内16個が今回の調査より元位置で残っていたことが確認され、金堂の平面規模は桁行7間(34.5m)、梁行4間(16.6m)であることがはっきりした。これは、武蔵国分寺金堂の桁行7間(36.6m)、梁行4間(16.8m)に次いで全国2位の規模である。また、相模国分寺は中門より向かって左手に塔、右手に金堂、塔と金堂の奥に講堂が置かれる法隆寺と同じ伽藍配置で構成されているが、法隆寺より遥かに大きな規模を呈している。



礎石の検出状況(御代七重さん提供)

なぜ、この海老名の地にこのように大規模な国分寺が造られたのか。

天平13(741)年聖武天皇の詔により、各地に国分寺が造られるようになった。本来、国分寺は国府の近くに置かれることが多い。しかし、相模国分寺の近くでは、国府跡は発見されていない。相模国府は8世紀の後半には現在の平塚に置かれ、国分寺とは離れた所に位置していた可能性が強いと考えられている。このことと大規模な国分寺が造られたことに関係はあるのだろうか。離れていたからこそ、大規模な国分寺を造る必要があったのだろうか。

金堂跡の調査は、十字のトレンチと基壇外装の数ヶ所にトレンチを入れての調査であり、金堂跡全面が掘られているわけではなかったが、十字のトレンチ内の土が取り除かれた礎石は、直径1m以上の巨石で、それを支えるための拳大の石が巨石の下に幾つも置かれていた。礎石だけ見ても、太い柱を支えられていたことが伺える迫力のあるものであった。

見学は12時前に終了し、現地で解散となった。筆者を含め数名は、相模国分寺や周辺の遺跡からの出土遺物などを展示している温故館を見学し、秋葉山古墳群まで足を運んだ。

相模国府や相模国分寺については、まだ解っていないことが多いが、この地で、大規模な施設が造られ、長い年月を経て、今日まで残っていた事に大きな意味を感じる。今後、ますますの調査と研究の進歩により、新たな発見を期待したい。

見学会雑記—史跡の調査と整備—

中川真人

県考古学会の主催により、発掘調査の現地見学会が、今年度に入り2回開催されました。1回目は8月28日に開催された、海老名市教育委員会と国士舘大学考古学研究室による国指定史跡「相模国分寺跡」の調査で、30名ほどの参加がありました。2回目は10月15日に開催された茅ヶ崎市教育委員会による国指定史跡「旧相模川橋脚」の調査で、50名ほどが参加しております(残念ながら、私は参加することが

できませんでした)。両日とも調査担当者並びに担当役員等のご尽力により、参加した会員皆さんにとっても、よい見学会になったものと思われま。やはり考古学の第一歩は現場であり、遺跡の上に立ち、遺跡がもつあらゆる要素を自ら確認することの重要性を再認識させられました。

さて、今回見学した2遺跡の発掘調査の大きな共通点は、その対象が既に指定されている「史跡」であるという点と、史跡の保存と活用を目的とした整備に伴う発掘調査であるという点です。

ここでいう「史跡」とは、一般的に使われているような「歴史上、重大な事件にゆかりのある場所や施設などの跡」(広辞苑)のことではなく、「歴史上又は学術上価値の高い」遺跡として、文化財保護法や条例により指定され、共有の文化財として、将来にわたり保存されることとなった遺跡のことを指します。考古学的には過去人類の活動の痕跡に変わりなく、「史跡」も同じ「遺跡」なのですが、文化財的な観点では、その保護の取り扱われ方が大きく変わってくるというわけです。ちなみに、文化庁のホームページによると、平成17年9月1日現在で、全国の史跡の件数は1,567件(特別史跡含む)になります。時代別に見ますと、原始が633件、相模国分寺跡を含む古代が350件、旧相模川橋脚を含む中世が257件、近世307件、近代20件となっています。神奈川県内では、県教育委員会のホームページによると、平成17年8月2日現在で51件が国史跡として指定され、県史跡が23件となっているようです。

海老名市の相模国分寺跡は今回の見学会で初めて訪れましたが、歴史公園として開放されておりました。そこでは、これまでの発掘調査の成果に基づき、寺の伽藍配置を構成する塔や中門、廊などが視覚的にわかるように復元整備され、その規模の大きさを体感できるものとなっておりました。このように地中にある史跡を保存しつつ、発掘調査による成果に基づいて、遺構を復元して「見せる」ことで、来訪者に往時の史跡の情景を想起させ、史跡を現代社会のなかに新たに活かす試みが、平成元年以降に各地で活発に行われるようになってきました。文化庁が示すところによると、史跡の保護は、その保存と活用により行なわれるものであり、そのための事業の

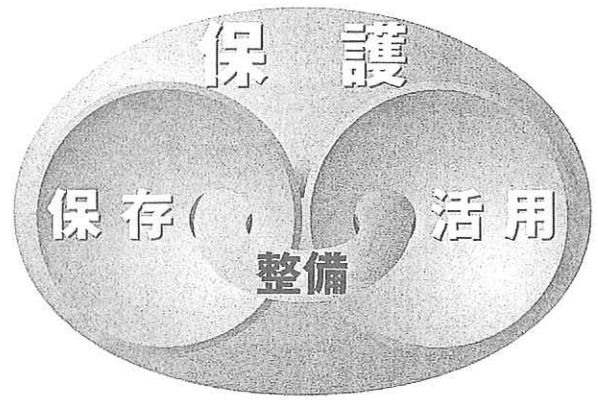


図1 史跡の保護(保存・活用)と整備概念図
(文化庁文化財部記念物課監修2005)

過程に対する技術的な側面からの各種の措置を施すのが整備であり、史跡整備は史跡の保存と活用をつなぐものとして概念化されています(図1)。

国史跡である相模国分寺跡や旧相模川橋脚で行われている発掘調査は、こうした理念のもとに、整備を目的として行われていると捉えられます。今回行われた相模国分寺跡の第10次調査は、金堂跡、伽藍地東側の区画施設(築地塀)、推定経蔵跡などの解明を目的に行なわれ、その内容は御世氏により見学記(前頁)で触れられておりますので、ここでは茅ヶ崎市の旧相模川橋脚発掘調査の取り組みについて、史跡整備との関連でみていきたいと思。います。

国指定史跡「旧相模川橋脚」は1923(大正12)年9月1日の関東大震災と、翌年1月15日の地震により、それまで地中に埋まっていたものが、水田に突如としてせり出してきた、中世鎌倉時代に相模川に架けられていたと推定されている橋の橋脚跡です。1926(大正15)年10月20日に国史跡に指定されており、橋脚跡という非常に特殊な史跡になります。これまで池の中で橋杭7本が水面より頭をだして保存されてきましたが、地震後80年近い月日の経過により、橋杭の露出部分を中心に腐食が進んでいる状況を受けて、茅ヶ崎市教育委員会がその保存に乗り出したのが、発掘調査の経緯のようです(大村他2002)。史跡の整備は事の経緯からわかるとおり、遺構(橋杭)の保存をどう行なうかが最大の目的ということになります。発掘調査は平成13年度から実施され、平成16年度の調査、そして今回見学会が開催された平成17年度調査が実施されています。

最初の平成13年度の発掘調査では、橋杭の残存状態や腐植状態、遺構としての下部構造の調査、さらには地震による橋杭の出現のメカニズムの解明を調査目的とされています。つまり、史跡を整備するには、当然ながら遺構の保存状態や分布状況、その規模、構造、構築時期、共伴遺物との関連性、遺構間の関連性、史跡の空間構成など、考古学的にも共通した史跡の全体像の解明、及びその本質をきちんと捉えることが、その後の史跡の保存・活用のための整備計画を検討する上で重要であると考えられます。

また、地震によって橋脚がせり出したという点は、この史跡としての重要な要素と捉えられるので、そのメカニズムに調査成果にもある液状化現象や噴砂等の地震痕跡から接近することも、史跡を理解するうえでは重要な点といえます。併せて史跡の位置と周辺環境、相模川河口の変遷、土層堆積状況から見た相模川流路の推定、周辺遺跡の調査成果と文献史料から検討される中世の街道など、史跡を取り巻く自然環境や社会環境の検討がなされています。史跡を取り巻くこうした環境には、史跡がそこに形成された歴史的・社会的・自然的脈絡があるものと考えられますので、史跡の立地を理解するうえでも重要な点となります。

この時の調査では、調査に先立つ池の水抜きの前には、池の生物調査が実施されています。調査の結果、「カワアナゴ」というハゼ科の一種が発見され、絶滅危惧種に指定されていたようです。史跡そのものとは直接的な関係はないのですが、史跡を総合的に評価し直し、現代社会のなかで活かしていく上では、こうした点も史跡に付加価値を与え、橋脚跡に対する価値観を新たに付与することにもつながる可能性を秘めているのかもしれませんが（史跡整備と自然環境の保護もまた難しい問題を含んでいます）。

見学会が行われた平成17年度調査では、橋杭の規則的な配置状況から想定される未検出の橋杭の分布確認や、厚板と角柱から構成される特異な遺構を調査して、解明することが目的となっているようです。今回の調査については、残念ながら実際に確認できませんでしたが、いずれにしても調査にあたっては綿密な調査目的を立てて行われているようです。

これまで見学会が行われた国史跡「旧相模川橋脚」

の発掘調査について、史跡整備との関連性を中心にみてきました。史跡整備にあたっては発掘調査成果に基づき、史跡の全体像を的確に把握することが大前提となります。とはいえ発掘調査も史跡の破壊であるので、綿密な調査計画を立てて、最小限の調査で史跡の保存状態や本質的価値を的確に捉えなければなりません。史跡の状態を把握することで、いかに保存を確実なものとするのかが検討されます。また、発掘調査や関連研究の成果により、復元展示する場合の真实性を保持していく必要もあります。発掘調査による史跡の本質的価値の把握は、どのように史跡を整備するかといったコンセプトを立てる上でも、大きな課題となります。

史跡整備のための発掘調査は、個々の史跡により当然その目的は異なりますが、発掘調査により史跡本来の価値を引き出し、新たな付加価値を与えることは同じです。大きな可能性を秘めた史跡を現代に活かし、上手に育てるのは、保存と活用をつなぐ整備如何にかかってきます。

国指定史跡「旧相模川橋脚」の発掘調査では、30年先を見据えて、調査すべき部分を残していると聞いています。将来に託し、将来に新たな価値を引き出していく。史跡としての成長が楽しみです。

実は私も史跡整備の仕事に携わっており、今回はそうした目でちょっと記してみました。最後になりますが、ご多用中にも係わらず色々ご教示いただきました大村浩司さんに感謝申し上げます。

参考文献

- 大村浩司・渡辺清史・新倉 香 2002年『国指定史跡 旧相模川橋脚』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告第16
- 史跡等整備の在り方に関する調査研究会 2001年「史跡等の保存・整備・活用事業の在り方について（報告）」『月刊文化財』453号所収
- 文化庁文化財部記念物課 監修 2005年『史跡等整備のてびき—保存と活用のために—』同成社
- 村田善則 2005年「施策紹介『史跡等整備のてびき—保存と活用のために—』」『文化庁月報』438号 文化庁編

※ご寄稿ありがとうございました。 編集者

(.) 会からのお知らせ (.)

平成17年度 考古学講座

じょうかんあと
「神奈川の城館跡」 開催予告

日時：平成18年2月5日(日) 午前10時15分～午後4時45分(開場：午前10時00分)

会場：かながわ県民センター 2Fホール(資料代 一般1500円・会員500円予定)

交通：横浜駅西口より徒歩5分 問い合わせ：講座担当 上原正人 TEL:090-9363-7467

◆ 開催趣旨 ◆

平成12年度、中世前期波多野氏に関連する城館が東田原中丸遺跡で検出されました。この調査は、相模地域では珍しい白かわらけも多数出土するなど、中世全時期を通しての城館研究がさらに充実する契機となりました。

平成17年度の考古学講座では、この機会に「中世城館の流れ」をテーマとして講座を開催いたします。城館の研究者が一堂に会する講座が行えるのは神奈川県考古学会ならではといえます。

講座ではそれぞれの城館について地域性・時代性・特質を明らかにしたいと考えており、最後に総括にかえてミニシンポジウムも企画しております。

◆ 発表次第(仮題・予定含む) ◆

10:15～10:20 開会挨拶 寺田兼方(神奈川県考古学会 会長)

10:30～11:00 「東田原中丸遺跡」 霜出俊浩氏

11:00～11:30 「鎌倉」 斎木秀雄氏

11:30～12:00 「伊勢原の城館」 安藤洋一氏

… 昼休み …

13:00～14:00 「特別講演」 前川 要氏(中央大学文学部教授)

14:00～14:30 「津久井城」 近藤英夫氏

14:30～15:00 「小田原城」 諏訪間 順氏

… 休憩 …

15:10～16:40 ミニシンポジウム「神奈川の城館跡」各講師

16:40～16:45 閉会挨拶 岡本孝之(神奈川県考古学会 副会長)

紙上発表

「宮久保・上浜田遺跡」 國平健三氏

「山北町 河村城」 武井宏仁氏

「横浜市 茅ヶ崎城」 坂本 彰氏

『考古論叢 神奈河』原稿の募集

『考古論叢神奈河』は皆さまで育てる会誌です。会では第15集以降の原稿を募集しております。考古学会に衝撃を与えるような論文はもちろん、研究ノートや資料紹介も歓迎します。ふるってご投稿ください。

執筆を希望される方は、来年の8月末日までに「執筆申込書」を会誌担当役員宛てにご提出ください。折り返し「執筆要項」をお送りしますので、要項にしたがってご執筆ください。原稿の締め切りは同年12月末日、刊行は翌年3月となります。

なお「執筆申込書」は、第14集の誌面中に掲載する予定ですが、今年度中に第15集への執筆を希望される場合は、会誌担当役員あるいは下記の問い合わせ先にご連絡ください。

問い合わせ：会誌担当 滝沢晶子(株)博通 0467-25-6023

『考古かながわ』原稿の募集

当連絡誌も次号の原稿を募集中です。会主催の行事参加記や感想文、会へのご意見・ご要望に限らず、県内で開催された展示会や、聴講された講座の感想などもお寄せください。

次号は来年3月末刊行を予定しております。投稿をご希望の方は、2月下旬までにお気軽に下記へご相談ください。

問い合わせ：連絡誌担当 秋田かな子

東海大学校地内遺跡調査団内

0463-50-2419(直通)

＼(o^)/ 催し物情報 12月～3月

* 展示会 *

◎神奈川県立歴史博物館

横浜市中区南仲通5-60 TEL: 045-201-0926

コレクション展示「石の造形—縄文時代の石器—」

会期: 2006年1月7日(土)～2月5日(日)

◎横浜市歴史博物館

横浜市都筑区中川中央1-18-1 TEL: 045-912-7777

「横浜の遺跡展～弥生時代の集落と生活～」

会期: 2005年12月11日(日)～2006年1月16日(月)

企画展「古代国家の成立と東国」(仮題)

会期: 2006年1月28日(土)～3月19日(日)

◎横浜都市発展記念館

横浜市中区日本大通12 TEL: 045-663-2424

企画展「地中に眠る都市の記憶

地下遺構が語る明治・大正の横浜」

会期: 2005年9月3日(土)～12月11日(日)

◎相模原市立博物館

相模原市高根3-1-15 TEL: 042-750-8030

「公開 勝坂遺跡第一次調査資料」

会期: 2005年11月8日(火)～12月11日(日)

◎川崎市市民ミュージアム

川崎市中区等々力1-2(等々力緑地内) TEL: 044-754-4500

「資料が語る川崎の歴史」展

会期: 2005年10月8日(土)～2006年1月29日(日)

◎秦野市立桜土手古墳展示館

秦野市堀山下380-3 TEL: 0463-87-5542

巡回展「武家の古都・鎌倉—発掘された中世の世界」

会期: 2005年11月30日(水)～12月18日(日)

特別展「縄文晩期の秦野」

会期: 2006年年2月8日(水)～3月27日(月)

◎馬の博物館(根岸競馬記念公苑)

横浜市中区根岸台1-3 TEL: 045-662-7581

テーマ展「古代中国・馬と人間の歴史」

写真展「日本の馬(日本在来馬)」

会期: 2005年12月3日(土)～27日(火)

◎茅ヶ崎市民文化会館

茅ヶ崎市茅ヶ崎1-11-1(茅ヶ崎駅北口より徒歩8分)

TEL: 0467-85-1123

「茅ヶ崎市遺跡調査速報展」

会期: 2005年12月10日(土)～12月16日(金)

◎藤沢市民ギャラリー常設展示室

藤沢市藤沢438-1 JR藤沢ルミネプラザ6F

(JR藤沢駅北口から徒歩1分) TEL: 0466-26-5133

「第6回 藤沢市遺跡調査速報展」

会期: 2006年2月7日(火)～3月5日(日)

開館時間 10:00～19:00 ※日曜は17:00まで

* 講座・発表会 *

◎安藤文一氏/刈谷俊介氏 対談「西相模の中世武家社会」

日時: 12月11日(日)13:30～15:30

場所: 秦野市立桜土手古墳展示館(申込み制80名)

問い合わせ: 同館 TEL: 0463-87-5542

◎第5回 考古学講座

第I部 弥生時代の墓制

講師: 池田 治(財) かながわ考古学財団

第II部 神奈川県内における奈良・平安時代の郷配置

講師: 河野喜映(財) かながわ考古学財団

日時: 12月23日(日)13:30～15:45

場所: かながわ県民センター 2階ホール

(横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 横浜駅西口から徒歩5分)

問い合わせ: (財) かながわ考古学財団資料活用課

TEL: 045-252-8661

◎研究講座「横浜の弥生時代—集落と墓地から

うかがう米作りの開始—」

講師: 武井則道((財) 横浜市ふるさと歴史財団

埋蔵文化財センター調査研究員)

日時: 1月8日(日)14:00～15:30(受付13:30～)

定員: 170人 先着順

参加費: 500円

問い合わせ: 横浜市歴史博物館 TEL: 045-912-7777

◎「第16回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会」(入場無料)

日時: 12月11日(日)10:00～16:30

場所: 茅ヶ崎市民文化会館 小ホール

(神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎1-11-1)

問い合わせ: 茅ヶ崎市教育委員会 TEL: 0467-82-1111

内線3343

◎「第23回 藤沢市遺跡調査発表会」

日時: 2006年2月11日(土)13:00～16:30

会場: 藤沢市民会館 小ホール(藤沢市鶴沼東8-1)

主催: 湘南考古学同好会

※「発表会」終了後「速報展」会場にて発

表者による展示解説実施 16:50～17:50

問い合わせ: 藤沢市教育委員会 TEL: 0466-50-3561

考古かながわ 第34号

発行 神奈川県考古学会

発行日 2005年12月5日

編集者 秋田かな子・中川真人・渡辺 務(連絡誌担当)

印刷 (有)湘南グッド

発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方

〒251-0043

藤沢市辻堂元町4-17-4 弥生荘102

郵便振替 00240-9-71208